

## 人に優しい聖公会生野センター・これからも

菊池 邦杏

2002年4月に10周年を迎えた聖公会生野センターは、2003年3月16日の最後のイベント「東西五人囃子」(あっちもこっちもみんないきいき)で有終の美を飾った。永六輔、筑紫哲也、辛淑玉、趙博、桂あやめ各氏5人によるトークショーが、それぞれの人柄によって盛り上げられ、世界の社会問題を痛切に批判しながらアピールしたことは痛快でもあり、会衆の心の奥に潜んでいたモヤモヤを引き出してくれるきっかけとなったことと思う。

北朝鮮の拉致問題、イラク攻撃問題、在日韓国朝鮮人に関わる日本人の問題、大相撲の表彰式の際、女性知事(大阪の太田房江知事)が土俵に登れない問題、テレビ報道関係の問題等々話題は多岐にわたって展開された。共通する中心的なものは、権力者がいかに差別構造を生み出し、少数者や弱者をないがしろにしているかということだった。生野センターが目指す「社会的弱者との共生」はまさにその構造への挑戦であり、イエスの生き方の実際化であろう。

聖公会生野センターが、日本聖公会の総会で決議され、支援を得ているのは、単に在日韓国朝鮮人会衆への懺悔としての聖ガブリエル教会復興に伴う付属施設という意味ではない。聖ガブリエル教会は「祈りの家」、聖公会生野センターは「働き

の家」として両者が両輪として稼動するならば、その働きは、神様によって大きな力へと導かれるはずである。また、信徒がこのセンターの働きを教会の象徴する姿としてとらえ、支え、その働きを学び、自らを成長させることができるならば、日本聖公会は社会的弱者を含む他者を支え合うことのできる骨太の教会形成を目指していくことができると思う。

管区は社会問題に関わる宣教課題をいくつかの委員会に託してきた。聖ガブリエル教会と聖公会生野センターおよびこひつじ乳児保育園の設立には管区の総会がこぞって支援した。あわせて大韓聖公会のご協力も得られた。在日韓国朝鮮人の歴史的な不幸を日本人の問題として、キリスト者として取り組めたことは、日本聖公会の大きな成長の徴(しるし)になったと神に感謝したい。

在日の歴史を学ぶことは、日本が権力者を守り、庶民を犠牲にし、軽視して、人間の尊厳を踏みにじってきた歴史を学ぶことである。天皇制問題、部落差別問題、ハンセン病者や障害者への偏見差別、滞日外国人差別問題、子ども・高齢者への取り組みに通じる学びである。米英イラク戦争の経緯を見ても、北朝鮮の拉致問題にしても独裁的権力者という強者の一方的な行為が引き起こしていることが分かる。強権と武力をもって他を支配していく姿は、つい58年前までの日本であり、北朝鮮とかフセイン政権と同じことをしてきたのを目の当たりに見る思いである。しかし、武力攻撃や経済制裁での対応は、憎しみを増幅させるだけである。憎しみは愛を生まない。イエスが社会に顧みられない人々と共にいてくださった愛は、人を大切にすることである。聖公会生野センターはその愛と優しさを実践し続けている。

(きくち・くにひろ 日本聖公会正義と平和・日韓協働委員会委員長)



### もくじ

- 1 人に優しい聖公会生野センター・これからも
- 2 時のしるし  
次の世代に語り継ぎ、後から生れてくる民に…
- 3 多民族・多文化共生のすすめ⑥
- 4 10周年記念事業をおえて  
聖霊の働き 枠を越えて
- 5 10周年記念事業をおえて  
10周年記念事業一大成功で終わりました
- 9 こんな本あります
- 10 詩 開戦
- 11 韓国市民の眼⑥
- 12 ご支援ありがとうございます
- 14 お知らせ/読者の声/余韻



イエスは十字架の上で絶命する直前に、二度にわたって「叫び」をあげられている。最初の叫びは、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という叫びである。もう一回は、まさしく絶命される瞬間の最後の絶叫である。マルコ15章37節には「イエスは大声を出して息を引き取られた」と記録された。これ以上、何の説明も必要とはされない、実に強烈な言葉である。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」というイエスの叫びは、二千年にわたる教会の歴史においても、常に議論となってきた、難解な箇所でもある。神の子であるはずのイエスがなぜ、このような実に人間的な叫びをされたのか。なぜ、神をうらむような言葉を発せられたのか、という問いである。

この言葉そのものは、実は、詩編22編1節の言葉である。「わたしの神、わたしの神、どうしてわたしを見捨てられるのですか。どうして遠く離れて助けようとはせず、わたしの叫びを聞こうとされないのですか」、という言葉の一部を、イエスが叫ばれたことが分かる。詩編22編の1節、2節は、確かに、神への絶望的な叫びである。さらに、どのような痛みを受けるのかが、12節以下に、切々と描かれる。しかし、イエスが叫ぼうとされた言葉は、ただ絶望と悲惨への嘆きではなかった。むしろ、神への徹底した信頼と未来への希望であった。24節にはこうある。「神は悩む人の苦しみを軽んぜず、いとわれず、顔を背けることなく、その叫びを聞きいれた。神の恵みによって、民の集いで賛美をささげ、神をおそれる人々の前で、わたしは誓いを果たす。貧しい人は糧に恵まれ、神を求め人は主をたたえる。いつまでもあなたがたの心は生きるように」。

そしてイエスが、十字架の上で絶命する直前に叫ばれたのは、実は30節、31節だったのではないか。「わたしは神のために生き、子孫は神に仕える。彼らは主のことを次の世代に語り継ぎ、後から生れてくる民に、神のみ業、その救いを告げ知らせる」。イエスは、実は詩編第22編の最後までを叫ぼうとされたのではないか。それは実は神への絶望ではなく、たとえ自分の命が絶えようとも、神のみ業、主の平和を語り継ぐ者が次から次へと与えられるのだ、という確信に満ちた希望の叫びであった。しかし、イエスには、もう最後の節までを叫ぶ余力は残っていなかった。1節の半分を叫んで力尽きてしまった。もしかすると、その後も、言葉にはならなかったが、心の中で22編の続きを唱えていたのかも知れない。そして、「イエスは大声を出して息を引き取られた」とあるこの絶叫とは、もう明瞭な言葉とはなっていなかったが、詩編22編の最後の節、31節「神のみ業、その救いを告げ知らせる」という最後の福音の宣言であったのではないかと思う

## 次の世代に語り継ぎ、後から生れてくる民に

西原 廉太

のである。

今、私の目の前には、一枚の写真がある。この写真は、米軍のバグダッド占領後に、ある日本人カメラマンが撮影したものである。バグダッド市内中央部にあるサダム中央病院を訪れたそのカメラマンは、その場に繰り広げられている阿鼻叫喚の状況に言葉を失ったという。建物ごと米軍の攻撃にあい、無数の人々の命なき体が重なりあっていた。CNNやFOXテレビに代表されるアメリカのマスメディア、そしてそれに追随する日本のメディアを通して、このような凄惨な姿は伝えられない。イラクの人々の悲惨な姿を見せないように、徹底的に管理されているからに他ならない。アメリカ政府が言うような「きれいな戦争」などあるわけではない。この写真は、その病院に横たわるおびただしい体の中にあつた、一人のまだ小さな男の子の遺体である。年の頃はおそらく小学2、3年生だったという。この子は、ブッシュ大統領が、「戦争」という選択さえとらなければ、今も元気に青空の下で友だちと遊んでいたはずである。この子のお母さん、お父さん、そして兄弟たちはどうしているのか。一緒に殺されてしまったのか、あるいは、今もこの時も、わが子を探し求めているのか。それは分からない。

この子の受けた苦しみは、イエスの十字架の上での痛みと本質的に繋がる。この子もまた、十字架の上のイエスと同じように叫びをあげた。彼が受けた苦しみは、詩編22編に描かれた苦難そのものである。「雄牛の群れが、わたしを囲み、バシヤンの猛牛がわたしに迫る。たけり狂う獅子のように、歯をむき出してわたしに襲いかかる。わたしはこぼれた水、骨は皆はずされ、心は蠟のように溶けた。あごは土器のかげらのように乾き、舌は上あごにつく。私は死の塵の上に伏す。犬が私を取り囲み、悪を行う者の群れが迫り、わたしの手足を縛った。わたしはさらし者にされ、彼らはわたしを見つめる」。

まったくの理不尽な暴力の中で死へと渡されていった、この子の叫びを前にして、私たちがなさなければならぬことは、ただ一つ。それは、私たちが、「主のことを次の世代に語り継ぎ、後から生れてくる民に、神のみ業、その救いを告げ知らせる」ことである。私たちは、私たちの次の世代に、すべての命と尊厳が決して破られることのない世界、復活の主の平和、シャロームという神の平和の世界を、告げ知らせなければならぬのである。そこにこそ希望がある。私たちはこの時にあっても、絶望ではなく、希望を語り続ける者となりたく願う。私たちは、復活の主に徹底して信頼し、つき従う者として、平和への希望を、語り継いでいきたいのである。

(にしはら・れんた 中部教区司祭、立教大学教員)

## 外務省は、自らの立場を恨むか？ 文部科学省を恨むか？

金光 敏

日本政府が、「子どもの権利条約」に批准したのは1994年。子どもを「保護」の対象から、子ども自身が権利の主体であることをその趣旨とする条約に、日本政府は批准をもって参加した。来年で、条約批准10周年を迎えるが、その前に日本政府は、関門をクリアしなければならない。日本政府が作成した第二回政府報告書に対する国連委員会の審査が今年10月と来年1月に準備されている。

政府報告書に対する審査とは、条約の国内履行監視機関である国連各種人権委員会が、5年に1度批准国からの報告を受け、条約の国内履行状況を審査することを言い、条約上で義務化されている。履行状況が不十分な場合は、委員会名で、批准国政府に対し是正勧告を出すことができる。この是正勧告に法的な拘束力はないものの、国際的な地位に傷をつけることは言うまでもない。

今回審査される第二回日本政府報告書は、すでに国連に提出されており、今年10月の予備審査と、来年1月の本審査が、スイスジュネーブの国連ヨーロッパ本部で準備されている。この日本政府報告書に対する審査で注目されるのは、やはり在日外国人の子どもたちの人権に関わる分野であろう。とりわけ、前回の号でも紹介した在日韓国・朝鮮人の民族教育に関わる問題は注目される。1998年に日本政府は、条約批准後初めての国連審査を受けた。その審査後の最終見解において、在日韓国・朝鮮人の民族学校問題が指摘され、早急な是正措置を行うよう日本政府に求めた。国連の場において在日韓国・朝鮮人の民族教育問題が議論されたのは、これが初めてであった。

この国連機関による日本政府への是正勧告は、子どもの権利委員会委員たちの見識によるところであるが、一方で、朝鮮学校関係者たちによる国連を舞台にしたロビー活動の賜物であることを忘れてはならない。何とか、朝鮮学校など民族学校

への差別をなくしたいとする卒業生や保護者たちの思いが、ジュネーブに届いたのである。1998年に国連子どもの権利委員会が日本政府に示した最終見解がどれだけ在日韓国・朝鮮人の教育関係者らを勇気付けたことか。

ところが、あれから5年が経った今も是正は進んでいない。それどころか、前回の号で記述した通り、新たな差別を生み出さんとする動きさえあった。いや卒業資格問題では差別政策が凍結されたものの、外国人学校への税制優遇問題では、一部欧米系学校のみ認められる差別政策が決定された。

さて今年10月と来年1月に予定されている審査において、日本政府は、当然指摘を受けるだろう前回の勧告内容について、どう説明するか。この国連審査に臨む外務省は、その対応に苦慮することであろう。論理的にも道義的にも説明不可能な民族学校への差別を、国際舞台で堂々と正当化しなければならない外務省は、外交を担当する自らの立場を恨むべきか、それとも理不尽な説明を強いる文部科学省を恨むべきか。

民族学校関係者は、もちろんのこと、多くのNGOが国連へのカウンターレポート提出を準備している。カウンターレポートとは、日本政府報告書に対して提出される民間の報告書であるが、そこでは今回の外国人学校をめぐる日本政府の動きが詳細に触れられる。

子どもの権利条約は、その名の通り、子どもの側に立つ優れた条約である。日本政府はもちろん、日本社会構成員の一人ひとりが、その理念を受け止めるとともに、子どもたちの心身の成長が保障され、社会参画が叶うそんな社会づくりを私たちは課せられている。それがこの条約のめざす社会である。

(きむ・くあんみん 民族教育促進協議会事務局長代行)

## 聖霊の働き 枠を越えて

竹田 眞

聖公会生野センター10周年記念の事業を通して感じたことは、(教会用語を使わせてもらえば)、「聖霊の働き」と言う事です。聖書によれば聖霊の働きの特徴の一つは、自分(たち)の枠を乗り越えることです。3月16日の大阪女学院・ホールチャペルでの『東西五人囃子』は素晴らしいトークショウでしたが、特にこの催しでこのことを認識させられました。

もともと生野の地域の在日韓国・朝鮮人のための奉仕活動として聖公会の総会決議で発足した聖公会生野センターの働きは、もはやこの活動領域を越えているという事でした。この10年の歴史で、おそらく日本聖公会自身もこのような展開を予想していなかったと思います。その意味でセンターの存在は聖公会も越えているのです。

3月16日の『東西五人囃子』の催しにはホールチャペルが満員になるほどの観客(観客と言うよりも参加者)でしたが、その様子を見て、聖公会生野センターが関わっている人々が聖公会はもちろん在日韓国・朝鮮人を越えていることがわかりま



した。在日の人々の関係だけではなく、障害者と支援するグループの関係の人々など、そういう、いわば現代日本の社会で生きるのに何らかのハンディーを負っている人々とサポーターで満員だったのです。この共催した団体も被災障害者支援NPO法人「ゆめ・風・10億円基金」でした。

最近の日本の動向は福祉国家から防衛国家に変貌していくように思われます。国外の敵対する勢力からの防衛と、社会秩序を脅かす人々からの安全対策に力を注いでいます。自分の財産を守ること、個人の福祉は個人の責任の問題なのです。同時に公共のサービスは市場化されてその代価を払わなければなりません。その能力のない弱者は益々弱くさせられ、貧困者は益々貧困になり、福祉の恩恵にあずかるのが難しくなっています。

しかし、そのような事態は在日韓国・朝鮮の人々にとってはいまさら始まったことではなく、ずっと前からこれを経験しています。日本が福祉国家といわれた時代以前から、ずっと福祉政策の対象から外されてきています。自分の生活も権利も自分の手で守らなければならない生活をずっと生き延びてきたのです。しかし、いまや日本人の中にこのような"在日的"な生活を余儀なくされるひとびとが増えてきました。聖公会生野センターはこのような人々と共に生きる事を目指しているような印象を受けました。これが聖公会生野センター10周年に見えてきた、従来の枠を越えたビジョンです。聖霊の励ましにより聖公会生野センターのますますの発展を祈ります。

(たけだ・まこと 聖公会生野センター  
10周年記念事業委員長)

## 10周年記念事業-大成功で終わりました 実はその裏 少々大変だったんです

呉光現

### 【始まる前に】

聖公会生野センター開設10周年事業は無事に終わることができました。紙面の上ですが多くの人に感謝すると共に、報告を兼ねてここに少しふり返ってみたいと思います。

聖公会生野センターが開設されたのは11年前の1992年4月です。それから10年後、生野地域を中心としておこなってきた取り組みは社会の中心から遠いところに置かれている人々を大切にしてきたことにつけるかもしれません。この10年間、日本社会だけでなく世界中が「グローバリゼーション」の名の下に、「富益々富」「貧益々貧」が地球規模ですんでいます。また、イラク戦争を目の当たりにして平和を求める世界中の声にも関わらず、「力ある者がわがままを通して」しまいました。まさにこのことは聖公会生野センターが求めることの対極にある価値観の行使です。私たちは「平和」とは「戦争・争いのない状態」ではなく、人がその人として尊厳を守られ差別抑圧のない社会、それを求めることが「平和」であり、「平和へ道」と確信しています。

この3月までおこなってきた「10周年記念事業」はふり返ると「平和への道」を示そうとしたことであり、その為の「お祝い」でした。様々な困難が予想され、また現実に起こりましたが、多くの方々の祈りと支援が「10周年のお祝い」の成功に



朝鮮族の旅  
夜行列車で延辺に到着

つながったと思います。ここに「10周年」を少々楽しくふり振り返りに報告としたいと思います。

### 【始まり】

聖公会生野センターが10年経ち、何が一番大変だといえば財政でした。「このまま行くと経済的に破綻を来すかもしれない」、という恐れを関係者はみんな持っていました。その時だからこそ10周年にいろんなことをしようと決断したのが2001年の秋でした。すでに10周年目前であり、「今から始めたら11周年になるな」という陰の声にもめげずに、覚悟を決めたのでした。



朝鮮族の旅 いろいろ白頭山 山頂へ

10周年は「お祝い」です。そして、同時に日本聖公会がたたえた聖公会生野センターのことをもう一度全国の聖公会に知らせていこう、その為にもセンターが一番苦勞している「財政」をアピールしながら行っていこうと決めました。一言で言うと「10周年記念募金」です。それには多くの方の支持を得ると共に10周年の顔が必要でした。「顔」と言えば、①全国に知られていて②いざとなれば責任を取ってくれ③時間が取りやすい人……。竹田眞主教の顔を思いつきました。

★2002年1月4日・・・まだ正月気分が抜けな

私は連れ合いの実家、南関東の横須賀から、北関東の群馬県榛名に行きました。竹田主教と会うためです。出迎えてくれたのは竹田主教、鈴木育三さん、木村直樹司祭でした。バス停前の店で昼食を食べたあと、竹田主教自慢(?)のログハウスへ。そこで「10周年記念事業の顔=事業委員長になって下さい」「わかりました。ところで何をしたらいいんだ?」「文書に名前を使います。何回かは大阪での会議や行事に出て来て下さい。そして何かあればその時は事業委員長としてお願いします」そして竹田主教の承諾を得ました。

次は11教区の主教さんたちです。1人たりとも欠けることなく全員に呼びかけ人になってもらわねばなりません。何と言っての管区総会で打ち立てた聖公会生野センターです。まずは地元の高野晃一主教でした。

★1月29日・大阪教区主教邸で高野主教と面談。「500万円の記念募金を考えています。そして以下の記念行事を行いたいと思います。「う〜ん、景気が悪いからなあ。大丈夫でしょうか」「はい、何とかします。500万円の募金が集まらなると金額以上にその精神において聖公会生野センターの未来も非常に厳しくなります。」「そうですか、がんばりましょう。2月の主教会でアピールしましょう」



朝鮮族の旅  
食文化を満喫

★2月18日・神戸教区教区館にて古本首座主教と面談。「ここまで来たのですから、がんばりましょう」「2月の主教会で時間を取ります。来てアピールして下さい」

★2月27日・川口基督教会にて主教会に陪席。元大阪教区司祭で一時聖公会生野センターの運営

委員長も務めた植松誠北海道教区主教、同じく宇野徹北関東教区主教の顔も・・・懐かしい。そして10周年記念事業の呼びかけをお願いし、全員が快諾。これで正式に10周年記念事業が開始できる、すこし安心しました。しかしこれはまだまだ「始まり」であり、終わりではなかったのです。



朝鮮族の旅  
潘陽の朝鮮族の市場

【事業】

10周年記念事業は①500万円の募金②中国朝鮮族の旅③記念礼拝④記念誌の発行⑤イベントでした。後に⑥として21世紀人権展(丸木美術展)をソウルで行うことになり、大がかりになっていきました。これは『祭り』好きの私にとってはとても楽しくなる予感がありました。ここではすこし裏話を中心に報告したいと思います。

①500万円募金・・・

「500万円くらいは大丈夫だろう」という竹田主教の一言は私の力になりました。「とにかく郵便を出す際にはしつこいくらい募金の依頼を出しなさい」という竹田主教の「決断」でこの1年間聖公会生野センターからの郵便にはいつも募金のお願いが同封されました。すぐに募金に応じてくれた方々には「またか」「またか」とあきれさせたと思います。おかげで目標を達成でき、4月以降もありがたいことに送金して下さる方がいらっしやいます。感謝です。そして地元の大坂教区は独自に金額を設定し、500万円の目標が700万円に増えました。これも大阪教区後援会の大車輪の活躍で目標をクリアできました。感謝してもつきることはありません。

②朝鮮族の旅・・・

ここで初めての経験にぶつかりました。何の経験か? 8月19日、韓国から戻ってきた日、旅行社マイチケットから携帯に電話が来た。「呉光現さん、延吉(朝鮮族自治州の州都)でのホテル、バスがすべて州政府により徴用されてしまいました」「??」「とにかく会いましょう。いつ大阪に帰りますか?」、その日、僕が飛行機を降りたのは関空ではなく成田である。翌日、横須賀にいた家族と一緒に大阪に戻る。その足でマイチケット社長の山田さんと“対策会議”。「何があったんですか? 政治的なことですか?」「いえいえ、州政府が自治州50周年の国内外の来賓のためにホテルを取り上げてしまったんです」「・・・」「どうしますか?」「最後まで追求しましょう」。

中国に帰っていた聖公会生野センターの韓国語講師に連絡を取りました。彼は朝鮮族です。旅行実現に向けて働きかけてくれた。彼がいなければ旅行を断念したかもしれません。最後は「聖公会生野センターは在日韓国人社会で大きな位置を占めている。こんなことをすると今後在日韓国人が中国に投資も含めて検討せざるを得ない(実際はそんなことはありません)と山田さんは大げさにアピールしてくれました。最終的にはホテルが確保できなくても旅行を実施する決断をしました。それはどうしても在日と中国の朝鮮族の違いをこの眼で見たい、という熱望と朝鮮族の彼を信頼したからでした。彼は非常に誠実な人であると共に



朝鮮族の旅 朝鮮族自治州50周年記念式典

今回の旅では彼ならなんとかしてくれる、と信じたからです。無事実施できた旅はまさにウルリム第25号の高仁鳳氏の記事にあるように素晴らしいものになりました。また日本と違う価値観で動く社会を体感できたのは、ややもすると単一の価値観に染まってしまうようになる私たちにとって一つの警鐘を与えてくれました。

③記念礼拝・・・

韓国からもお客さんを迎えて全国から100名以上の方々が駆けつけてくれた。特に竹田



記念礼拝

主教の説教「記念」とは苦難を記念し神の愛を記念するものであるというメッセージは聖公会生野センターにとっての何よりの「記念」になりました。

④21世紀人権展・・・

聖公会生野センターとも関係の深い韓国の方が提案し、日本聖公会、大韓聖公会の協力を得ながら実現しました。原爆の



原爆図

の作品を韓国・ソウルで行うことは深い意義があると考えたからです。未だに第2次世界大戦の終結が「原爆投下」に象徴されるきらいがあるが、実は暴力による集結は決してその後の解放をもたらさなかったことは戦後の東アジア、特に韓国の歴史をかいま見るならば歴然です。この美術展は日本聖公会のアジア・太平洋地域平和・和解資金を活用したのもでもありました。開催までに多くのハードルがありましたが、聖公会生野センター10周年の記念事業の一つとして行えたことは意義深いものでした。



⑤イベント・東西五人囃子

(あっちもこっちもみんないきいき)・・・

記念事業最後の大会イベント東西五人囃子は聖公会生野センターが教会を基盤にしつつも社会に向けて働くことを主な使命としていることの象徴でもありました。まさにイラク戦争が始まるとする3月16日、朝から降る雨の中を1000名もの人が集まりました。実はイベントの10日ほど前に筑紫哲也さんの事務所から「もしイラク戦争が始まれば、出演はキャンセルになるかもしれません」との連絡があったのです。しかし今回は5人そろっての五人囃子であり、また関西にはあまり来たことのない筑紫哲也さんが抜けると痛いなあ、と思いつつも当日の天候とこればかりは聖公会生野センターの思うにまかせられるものではありません。「仕方ないじゃないか。その時は4人で5人分がんばってもらおう」、と心に決めました。当日、筑紫さんも含めて五人囃子が実現した。じつは筑紫哲也さんは始まる5分前に到着。「僕、まちがって聖公会生野センターに行っちゃったよ。おかげで雨の大阪見物ができちゃったよ。」とのこと。とにかく五人揃って開演となりました。

その4日後、イラク戦争が勃発。正義のかけらもない戦争(今の時代、正義がある戦争はあり得ないと思う)が始まってしまったのです。

五人囃子はまさに「お祭り」にふさわしい楽しい会になった。女と男・在日と日本人というような切り方でない、一人ひとりの生き方が表れた楽しいひとときであった。1000人もの方々が聖公会



東西五人囃子

生野センターの10周年をお祝いに来てくれた、とと思っています。そして出演者5人だけでなく、会場にいた1000人が平和と人が大切にされる生き様を共有できた時空間でした。



ひと言の呉光現と牧口一二さん

以上、とりとめのない報告ですが、この1年間の10周年記念事業の報告と同時に、すこし裏話をご披露しました。

この10周年記念事業は多くの方々のお祈りとご参加、そしてご支援のたまものです。ここにもう一度、感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

(お・くあんひょん 聖公会生野センター総主事)

10周年記念事業会計状況

2003.4.30現在

収入	
10周年記念募金	8,156,419
延辺旅行	3,696,000
記念礼拝	495,538
丸木展	1,200,000
東西五人囃子	4,916,170
計	18,464,127
支出	
事務諸経費	788,888
延辺旅行	3,620,392
記念礼拝	432,634
記念誌	357,000
丸木展	1,300,000
東西五人囃子	4,184,199
小計	9,894,225
センター本会計へ	8,569,902
計	18,484,127

ご支援・ご協力ありがとうございました。

本から「在日コリアン」を考える ⑬

高二三

猪飼野

一追憶の1960年代  
曹智鉉写真集  
定価2800円+税  
新幹社



今まで「猪飼野」にかかわる本を何冊かつくってきた。『イカインコリアン歌留多』(金蒼生著)、『越境する民』(杉

原達著)など、それなりに話題にもなったし、出版者として世に問うことができ、喜びも感じてきた。しかし、いまさらながら、なぜ「猪飼野」に対するこだわりが強いのだろう、と思わざるをえない。その答えを今回の曹智鉉写真集『猪飼野-追憶の1960年代』を制作する過程で見つけたような気がする。

丁章という詩人がいる。『ウルリム』の読者なら知らない人はいない。彼は東大阪市に住んでいて、「猪飼野」の周辺から、いつも「猪飼野」を気にかけている人である。私も東京にいながら「猪飼野」を気にかけている。実際の距離はずいぶんちがうが、彼の「猪飼野」との距離のとり方、位置づけ方がとても私に似ていると感じた。世代も出身もちがいながら、なぜだか「猪飼野」に対する接し方にあい通ずるものがあるのだ。

その丁章さんから手紙が来たのが2002年夏だった。曹智鉉というカメラマンと知遇を得、その人が1960年代の「猪飼野」の写真をいっぱい持っている、出版を希望している、自分は新幹社が最適だと思う、と書いてあった。私は「在日」に関する本を世界で一番多く出版している出版者であると自負している。手紙を読んだ翌日、曹智鉉先生に電話をした。「ともあれ写真を見せて下さいませんか」と私が言うと、「出版は君にまかせた」との返事。すんなり出版することが決まった。

9月の大阪出張の折り、お会いする約束をした。

写真がどんな状況なのか少々不安だったが、会った時には、掲載すべき写真はすでに決められており、編集者としてはほとんど手を加える必要がないほど完璧な状態であった。

決めねばならなかったのは、文章を寄せていただく方々をどうするかだけだった。それも曹先生には腹案があり、結果は予定していた方々全員に原稿を書いていただくことができた。執筆された方々からは心のこもった文章が寄せられ、編集者としては一つ一つの原稿が届くたびに感動を受けたのだった。

そこで冒頭でのべた「猪飼野」へのこだわりを話を戻したい。

曹智鉉先生はなぜ1960年代の「猪飼野」を撮り続けたのだろう。曹先生は「目の前にある猪飼野の在り様を印画紙に克明に定着して置きたいという意気込みと、何時か歴史の証言に成り得る時代の到来を意識した」と書いている。この写真集はまさに風化して消えてしまいそうな1960年代の猪飼野を記憶にとどめ歴史化する写真集なのである。

しかし、「歴史の証言」でありながら、一枚一枚の写真に刻まれた、そこに生きた人々の姿、はたらく姿が、今はなくなりつつある風景と重なって、在日朝鮮人の生活史の風景となっているのだ。「猪飼野」で生まれたわけでもなく、そこで育ったわけでもないのに、「猪飼野」は在日朝鮮人の「ふるさと」なのである。かけがえのない地なのである。

そこでこの写真集に寄せられた文章がそれぞれに感動的なのは、一枚一枚の写真のもつ力強さ、それに「猪飼野」が持つ「ふるさと性」が加わって、おのずとよい文章が集まってきたといえよう。曹先生の写真があり、執筆者たちの「猪飼野」への思いがあり、それらのハーモニーとしてこの写真集は結実した。「猪飼野」が語り継がれるように、この写真集も長く語り継がれるだろう。

(こ・いーさむ 新幹社代表)

『猪飼野-追憶の1960年代』は  
聖公会生野センターで取り扱っています。

TEL 06-6754-4356 FAX 06-6754-4357

e-mail: ikuno@nssk.org

## 戦争加担国民である韓日の私たち

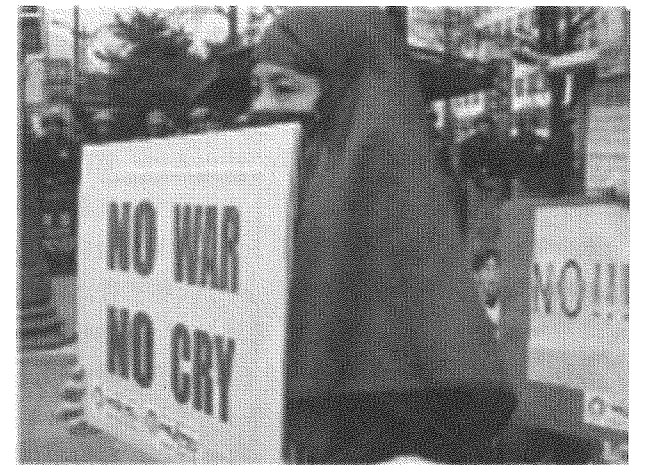
姜 惠 楨

いるのが、この間の韓日の状況ではないか。

もちろん、市民が沈黙していたわけではない。日本ではこれまでの平和運動に積極的ではなかったといわれる市民もが戦争反対の意思表示をし、各地でベトナム反戦運動以来といわれるほどの規模で反戦集会が続いた。韓国でも社会各層から反戦の声があがり、韓国が直接の被害国ではない戦争への反対運動が広範囲に繰り広げられたという意味では、おそらく韓国の平和運動における新しい地平が広がったといっても過言ではないだろう。

だが、戦争反対では不十分だ。参戦反対・派兵反対である。多くの世論が戦争に反対しながらも、イラクを攻撃するアメリカへの協力・派兵に一票を投じていた状況を、重く受け止めたい。戦争には反対だが国益は優先するというこの論理から、更なる一步を如何にして踏み出すことができるのか。一方では清算されぬ加害と被害の歴史を抱えつつ、新たな戦争で加害を共有してしまった韓日社会。その中の一員である私たちが、加害国民としての責任を自覚しつつ、市民としてつながる。それが形容矛盾だとしても、実現可能なことだと信じている。

(かん・へじょん 日本の教科書を正す運動本部  
[アジアの平和と歴史教育連帯] 国際協力委員長)



ソウルでの反イラク戦争デモ

アメリカのイラク全面攻撃をめぐる情勢が世界に陰を落とした数ヶ月。戦争加担国民になったことの実感から、羞恥心と苦しさ、怒りから抜け出すことができず、憂鬱だった。

韓国社会で価値観を形成した私にとって、加害国の一員としての自分に向き合うことを初めて問われたのは、日本の良心的市民と出会ってからだ。振り返れば、近現代の歴史を学ぶ中で、独裁が長く続いた自らの社会を自覚した頃から、また女性である自分を愛しく思いながら、私は被害の位置に自分を重ねていた。だが、日本で生活していた頃、日本のアジアに対する経済侵略や戦後補償に取り組む日本人と出会い始めてから、加害社会の一員としての自分を問うことの厳しさを少しずつ学ぶことができた。

2003年の春。アメリカのイラク攻撃への関わりを通して、韓日の「国民」はとても分かりやすい形で加害性を共有した。韓日両政府ともアメリカの侵攻に支持を送り、協力を約束したのである。

そのことを支えるそれぞれの論理が興味深かった。日本では昨年9.17以来の北朝鮮バッシングを更に煽る言説に連動する形で、北が攻めてきたらアメリカに協力してもらうためにも、今回の戦争に協力するべきだという主張が支配的だったように思う。韓国では、ブッシュ政権の誕生以来、朝鮮半島の危機を高めている主犯はアメリカだという意識は広がってきたものの、この戦争で、北朝鮮を目の敵にしているアメリカの機嫌を損ねてはいけない、朝鮮半島での戦争を望まない韓国の立場に配慮してもらうためにも、アメリカの要請に応じざるを得ないという論理がまかり通った。それぞれが似て非なる論理で北朝鮮の存在を口実にし、市民の反戦の声をつぶした。アメリカ覇権主義を支えるそれぞれの体制が、国益を主張する論理と合体し、戦争加担の国づくりに拍車をかけて

### 開戦

丁 章

憂鬱な日々のはじまり

無力感にさいなまれる日々のはじまり

一国家の文明力に

全世界が屈服させられてしまったのだ

文明は

便利を産み出すが決して豊かさを生み出しはしない

文明は

悠久の文化を一瞬に破壊する暴力を備えている

文明は

文化を助ける道具に徹するべきであり

文化こそが豊かさであることを

思い知るべきだ

これまでずっと声をあげつづけてきたはずではなかったのか  
なのにこのザマはいったいなんなのか

開戦の日

それは

憂鬱な人々と

無力な人々の

だからこそ新たな日々のはじまりだ

文明に屈しない

文化を築き上げるための

豊かさを求める日々のはじまり

武器ではなく

文化を手につよ

丁 章 (ちょん・ちゃん)

1968年、京都市にて出生  
大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業  
現在、大阪府東大阪市在住

著書

詩集『民族と人間とサラム』(新幹社)  
詩集『マウムソリ -心の声-』(新幹社)

## ご支援くださった方々のお名前

(2002年度：2002年4月1日～2003年3月31日・10周年記念募金を含む 敬称略)

いつも聖公会生野センターの活動をお祈りくださりお支えくださりありがとうございます。本来でしたらご支援くださったすべての方々のお名前を記し感謝申し上げるべきところですが、また、教会・グループ等でご支援くださり、お名前がわからないかたもおられます。あわせて感謝申し上げます。これからも、お祈りご支援よろしく願いいたします。

### <個人>

相川福江 相沢牧人 相原俊次 相原吉男 青柳美智子 秋葉晴彦・秋葉緑 秋山義孝 芦沢すま 東直子 東弘子 足立省一郎 安達宏昭 阿部雅良 安部一郎・安部恭子 尼子美喜 尼子ユリコ 荒井章三 荒川昌佳 有村一夫 李仁夏 李清一 飯田修 飯田徳昭 五十嵐正司 五十嵐文人 井口諭 池住圭 池本則子 石井悦子 石浦教良 石川雄基 石田浩子 石塚秀司 石橋市子 泉迪子 伊勢田健 磯國人 磯晴久 井田泉 一場貴久江 一花恭子 井出吉志子 糸井玲子 伊東照子 伊藤美佐子 稲原三千 井上真也 井原泰男 井原洋子 今北富三 今中富美子 今西益一 林芳子 岩井梅代 岩井伸子 岩城聡 岩坂正雄 岩垂悦子 岩野洋 岩本英 植田栄基 植田仁太郎 植田哲子 植松從爾 植松誠 上村玉栄 鶴飼良機 鶴川馨 打田茉莉 内海清博 梅本俊和 浦川十三夫 江川みつえ 江野隆夫 遠藤貴武子 遠藤恵子 遠藤哲 遠藤英子 遠藤雅巳 呉寿恵 大岡創大 音智恵子 大川千萬 大久保忠昭 大久保佳彦 大倉一郎 大黒清一 大郷博 大嶋果織 太田淑子 大田美智子 大津健一 大友正幸 大野和香子 大野和哥子 大橋襄 大畑喜道 岡墻敬子 岡嶋彦一 緒方貴子 岡田まり子 岡野峻 岡野利治・岡野敏子 岡本直樹 岡本雅由 岡本勝 小川弥生 興津健蔵 奥康功 奥田壮一郎 奥田哲夫 小貫ツマ 小野綾子 小野俊作 小野喬之 小野幸 小野周一 尾松恵美子 海保正里 垣内純子 景山恭子 蔭山典仁 葛西良治 柏原美男 片岡光子 片山敬子 片山春美 加藤進三 金木歌子 金子保志 金子壽子 金光秀晃 金宮星憲 加納実 上岡栄子 上森稱子 神谷尚孝 香山洋人 河崎望 姜富三 木川田一郎 菊地泰次 菊池緑 菊句静江 貴志真一 岸寿子 北村真紀子 北山和民 木下勝 金香百合 金京美 金春子 金静子 金必順 金永泰 木村国臣 鬼本照男 楠本良招 久保道則 久保潤豊彦 倉本和 栗山義信 紅林みつ子 黒崎光

太郎 黒田浩子 小池俊男 小出幸代 高地敬 河野裕道 河野芳孝・河野紀子 香山よしの 小崎清信 越賀玲子 越山健蔵 小杉尅次 小谷春夫 後藤恵美子 後藤真 小林克則 小林宏治 小林咲子 小林聡 小林史郎 小林哲也 小林尚明 小林満寿子 小林佳子 小松ひとみ 小室一 小山俊雄 齊藤祥子 齊藤壹 斎藤亮人 嵯峨崎順子 坂本春夫 桜井揚子 佐々木亜子 佐々木道人 佐々木靖子 佐々木庸 笹森田鶴 佐治孝典 佐竹純子 佐藤耕一 佐藤幸子 佐藤節子 佐野信三 鮫島留美 猿橋靖・猿橋正子 塩田純子 塩月斎 志賀成全 柴本孝夫 島田麗子 下条登代子 下條道子 笑福亭仁嬌 勝屋徹 白石美香 城下彰 杉原達 杉本美津子 須佐美浩一 鈴木あや子 鈴木育三・鈴木恵美子 鈴木慰 鈴木満紀子・鈴木慰 瀬尾泰大 関正勝 関本肇 莊所正明 高田須磨雄 高田日出男 高津達夫・高津寿江 高嶺正秀 高橋文子 高見 高見澤園子 高宮建治 滝口俊子 滝澤武人 武市温子 竹田和子 竹田眞 竹中達吾 竹中眞美子 竹林徑一 田崎安男 立川浩三 辰巳信義 田中恒久 谷市三 谷富夫 谷井尚子 谷元郁子 近澤淑子 千種百合子 趙博 丁章 塚田道生 筑田克夫 辻本秀子 蔦村の子 土田基子 坪井克己 坪井喜久 当舎あずさ 藤間孝子 藤間布美子 東峰多寿 徳田弘幸 戸田ひさよし 戸塚泰子 富谷晋 富満美佐子 豊川雅章 豊田英子 名出望 内藤昇 内藤義子 中岡千鶴子 中川正信 長崎由美子 中芝永次 中島千恵子 中西久忍夫 中野三枝子 中野玲子 中原恵 中原康貴 中村邦介 中村茂 中村大蔵 中村豊 柳堀素雅子 仁尾真理子 西川寿代 西田真哉 西台宏 西村逸郎 西村哲郎 直川埜子 直川義人 野田一道 野村潔 芳我秀一 橋本克也 橋本宣子 橋本浩清 畑野栄一 服部智子 花本時 早川善樹 早川義也 林国男 林国秀 速水敏彦 春名英夫 坂東長輝 樋口仁子 久下克己 飛田雄一 平賀てる子 平野淳子 廣岡靖隆 広木佐代子 廣政

博 廣政百々代 黄裕錫・金幸子 深田淳夫 深水君江 吹留辰雄 福田稔 福永芽久実 藤木典子 藤崎とよ 藤田東一 藤田剛一 藤波南美子 藤原俊 藤原紘子 古本純一郎 斐重度 斐薫 保坂久代 堀田とし子 堀貴美子 堀武 堀信子 堀江育夫 堀江富美 洪京子 本多修 本田哲郎 前島宗甫 前島素子 前田忠男 前田都 前田容子 正木絢子 増岡広宣 益海政一 松居勲 松井新世 松井妙子 松浦順子 松岡慶一 松岡寿子 松崎純二 松原恵美子 松原栄 松本一郎 松本潤子 松本信行 松本信代 松本文 松本正俊 松山龍二 真鍋倫子 真庭功 三木メイ 水谷博彦 水口正樹 三鍋裕 三原一男 宮川美津子 宮川八重子 宮嶋眞 宮脇博子 武藤慈子 武藤六治 宗像和雄 宗像千代子 村岡明 邑上太杞子 村上義夫 村田洋子 村松百合子 百井幸子 森紀旦 森美知 森田喜之 森中央 諸橋保夫 八尾恵三 八木一幸 八木正言 安永和夫 矢萩修二 山上操 山口瑛智子 山口哲 山崎ホシ子 山田和生 山田裕子 山根博子・山根由香 山本勝彦 山本顕子 山本眞・山本京子 山本由紀子 梁淑子 柳時京 横内洋子 横川浩 吉川功・麗園子 吉田孝子 吉田立 吉田常夫 吉田フサ子 吉田正義 吉村庄司 米村照子 米村路三 米山勉 和田智雄 渡辺新久

### <団体>

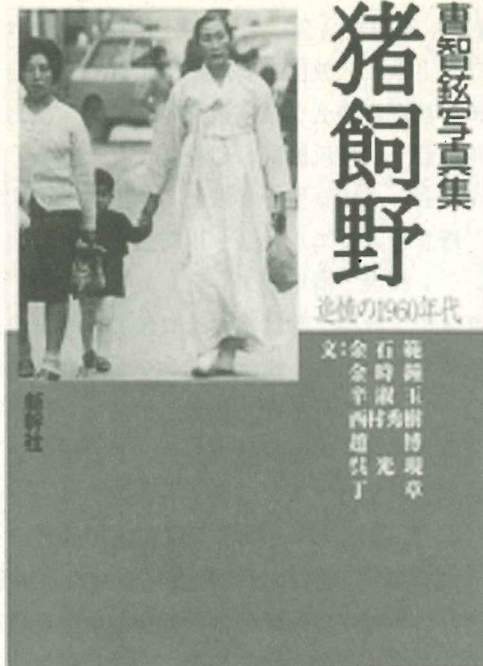
愛信福祉会 生野カトリック教会 生野地域活動協議会 大阪聖和教会 草ヶ江幼稚園園児一同 神戸在日韓国・朝鮮人児童生徒保護者の会 こひつじ乳児保育園 三光塾 下鴨幼稚園 松蔭中学校松蔭高等学校 新日本宗教団体連合会大阪事務所 聖十字福祉会マリア保育園 精神障害者地域生活支援センターすいすい 聖バルナバ病院サマリア会 東光学園 博愛社 プール学院 プール学院中学校・高宗教部 平安女学院短期大学キリスト教センター 平安女学院中学校・高等学校宗教センター 松山聖ルカ幼稚園 無窮花 桃山学院聖アンデレ礼拝堂 桃山学院大学聖教主礼拝堂キリスト教センター ヨルダン保育園 立教小学校 立教小学校ボランティアグループ 立教女学院 立教女学院小学校児童一同 立教学院諸聖徒礼拝堂 良善幼稚園 日本聖公会：関東三教区生野委員会 日本聖公会婦人会 [北海道教区] 網走聖ペテロ教会 北見聖ヤコブ教会 釧路聖パウロ教会 札幌キリスト教会 札幌聖ミカエル教会 紋別聖マリヤ教会 [東北教区] 釜石神愛教会 [北関東教区] 宇都宮聖ヨハネ教会

幸手基督教会 東松山聖ルカ教会 川越基督教会 [東京教区] 池袋聖公会 牛込聖公会聖バルナバ教会 神田キリスト教会 教区事務所 東京聖三一教会 東京聖テモテ教会奉仕会 東京聖マリヤ教会 練馬聖ガブリエル教会 [横浜教区] 伊豆聖マリヤ教会 市川聖マリヤ教会 小田原聖十字教会 小田原聖十字教会 婦人会 鎌倉聖ミカエル教会 川崎聖パウロ教会 清里聖アンデレ教会 清里聖アンデレ教会婦人会 甲府聖オーガスチン教会 静岡聖ペテロ教会 千葉復活教会 松戸聖パウロ教会 横浜聖アンデレ教会 横浜山手聖公会 [中部教区] 愛岐伝道区信徒会 愛知聖ルカ教会 新生礼拝堂 豊橋昇天教会 名古屋学生青年センター 名古屋聖マルコ教会 名古屋聖ヨハネ教会 [京都教区] 笠田キリスト教会 岸和田復活教会 京都聖ステパノ教会 京都復活教会 京都教区教務所 百済基督教会 桜井聖保羅教会 新宮聖公会 信徒の集い 聖アグネス教会 聖光教会 高田基督教会 田辺聖公会 田原本聖教主教会 富山聖マリヤ教会 奈良基督教会 初島聖十字教会 桃山基督教会 [大阪教区] 尼崎聖ステパノ教会 石橋聖トマス教会 恵我之荘聖マタイ教会 大阪教区婦人会 大阪教区連合男子会 大阪城南キリスト教会 大阪聖愛教会 大阪聖アンデレ教会 大阪聖アンデレ教会婦人会 大阪聖三一教会 大阪聖パウロ教会 大阪聖パウロ教会男子会 大阪聖パウロ教会婦人会 大阪聖パウロ教会有志の会 川口基督教会 川口基督教会婦人会 堺聖テモテ教会 聖贖主教会 聖公会生野センター大阪教区後援会 聖ルカ教会 聖ルシヤ教会 高槻聖マリヤ教会ミッション21 トマス・聖愛男子会交流会 富田林聖アグネス教会 西宮聖ペテロ教会 東豊中聖ミカエル教会 東豊中聖ミカエル教会婦人会 守口復活教会 [神戸教区] 神戸教区教務所 神戸昇天教会 神戸聖ミカエル教会 神戸教区婦人会 [九州教区] 福岡教会麦の会 [沖縄教区] 祈りの家教会 首里聖アンデレ教会

### ご支援ありがとうございます

10周年記念募金	8,156,419
後援会費	1,523,277
クリスマス献金	430,900
一般献金	3,409,684





**猪飼野**  
**— 追憶の1960年代**  
**曹智鉉写真集**

定価2800円+税 新幹社

文：金石範／金時鐘／辛淑玉／西村秀樹／趙博  
 ／吳光現／丁章／

この写真集と同時代、同空間を生きてきた僕は、この写真集の一世たちが別の世界の人のように見える。私の記憶に残っていなかった1960年代の写真をあらためて見る中で、間違いなく私は猪飼野の二世である、と四十代半ばにして懐かしさと記憶を僕に与えてくれるのである。(吳光現)

お求めは お近くの書店  
 または聖公会生野センターへ

**読者の声**

ともすれば、内向きの記事が多い中でイスラエルに抑圧されている事情が具体的に記されていて、そういう現実なのかとあらためてパレスチナの実態の一部を思い知らされた◆3月16日はとても楽しいひとときでした。スタッフの努力と熱意をありがたく思います◆いずれも興味深く読ませていただきました。共存が必要です。健全な共存こそ平和への近道だと思います。ご一緒に生きてまいりましょう。主の御名によって◆北関東は遠く、聖公会生野センターの働きを知り、思いを寄せる唯一の機関誌がウルリムです。機関誌を読むことで働きの輪に仲間入りさせていただいています。感謝！

**余韻**

3月16日の10周年記念イベント「東西五人囃子（あっちもこっちもみんないきいき）」は、たくさんの方々のご協力をいただいて、大成功におわることができました。ありがとうございました。しかし、その後、イラク戦争は始まり、世界は悲しい出来事がなくなることがありません。国会では有事法案が衆議院を通過してしまいました。一人一人が安心して暮らすために、本当にすべきことは、相手の声を聞くことから始まるのに、と思います。丁章さんの詩にあるように「武器ではなく／文化を手につけよ」そのとおりだと思います。(す)

**聖公会生野センターへのご支援をお願いします**

◇後援会費

年額 1口 3,000円（個人） 1口 10,000円（団体）

・郵便振込00960-0-133429 「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金

・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」

・銀行振込 U F J 銀行 東大阪支店

普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail: ikuno@nssk.org

http://www.nssk.org/province/ikuno

発行人：木村 幸夫

編集人：大橋 襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。